

私と『三国志演義』研究（下）

井 上 泰 山

【筆者は復旦大学からの要請を受け、2007年5月、同大学の古籍整理研究所において、「『三国志演義』と日本文化」というテーマのもとに、中国語による4回の連続講義を行った。本稿は、第2講の内容を日本語によって記録したものである。第1講の講義内容は本誌第2号に掲載した。】

三 葉逢春本『三国志通俗演義史伝』の発見と翻刻本の刊行

（一）『三国志演義』の各種版本に対する見直し

前回申しあげましたように、1967年に上海の郊外で成化年間の『説唱詞話花関索伝』が発掘された後、金文京氏を中心とする5人の若手研究者のグループが校訂本を作成し、1989年に汲古書院から『花関索伝の研究』を出版したことにより、日本の中国小説研究者に対して、もうひとつの『三国志演義』の世界の存在、乃ち、「関索」もしくは「花関索」が中心となって活躍する語り物としての『花関索伝』の存在を強く印象付けるとともに、関連する様々な問題についての新たな研究意欲を喚起することができたように思います。それまで一般的に知られていた『三国志演義』のストーリー展開とは全く異なる世界が存在することは、一般の読者にとっても、また研究者にとっても、殆ど未知の事柄に属すものであり、大きな衝撃をもって迎えられたように思います。「七実三虚」という言葉に象徴的に表されておりますように、『三国志演義』という小説は歴史書としての陳寿の『三国志』をベースにして多少の虚構を加えたものに過ぎない、といった、江戸時代以来作り上げられてきた常識を根底から覆

すことになったわけです。多くの読者を持つ岩波書店の雑誌『文学』に金文京氏の論文「関羽の息子と孫悟空」が連載されたことは、その点から見ても大変大きな意義を有していたと考えられます。

こうした認識の変化の結果、まず始めに研究者が手がけなければならなかったのは、現存する『三国志演義』の各種の版本の所在を確認し、その内容を詳細に検討しなおす作業でした。従来、断片的にしか知られていなかった「関索」もしくは「花関索」なる人物は、いったいつ頃から『三国志演義』に取り込まれたのか、また、それは『三国志演義』の出版の歴史から見てどのような意味をもっているのか、といった、最も基本的な疑問に対して正しい答えを出す必要が生じたのです。日本において89年から90年代前半にかけてこうした問題に取り組んだのは、金文京氏を始めとする数名の若手研究者でした。『花関索伝の研究』が出版されて以後5年間に執筆された各種の学術論文は、そのあたりの経緯をはっきりと示しています。後の説明を分かり易く進めるために、まずそれらの論題を執筆者や掲載誌とともに列挙しておきましょう。なお、論文の頭に付けた番号は、お手元に配布しました「関索・花関索関係文献目録(稿)」の番号と一致しておりますので、そちらも併せてご覧いただければ幸いです。

- 41 金文京「『三国演義』版本試探～建安諸本を中心に」：『集刊東洋学』第61号，1989
- 42 中川論「『三国演義』版本の研究～毛宗崗本の成立過程」：『集刊東洋学』第61号，1989
- 43 中川論「嘉靖本『三国志通俗演義』における「関羽の最期」の場面について」：『文化』（東北大学文学会）54巻1，2号，1990
- 44 上田望「『三国演義』版本試論～通俗小説の流伝に関する一考察」：『東洋文化』71，1990
- 45 上田望「明代における三国故事の通俗文芸について～『風月錦囊』所収『精選続編賽全家錦三国志大全』を手掛かりとして～」：『東方学』第84輯，1992
- 46 中川論「『三国志演義』版本の研究～建陽刊「花関索」系諸本の相互関係」：『日

本中国学会報』第44集, 1992

47 中川諭「『三国志演義』版本の研究～「関索」系諸本の相互関係」：『集刊東洋学』第69号, 1993

48 丸山浩明「余象斗本考略」：『二松学舎人文論叢』50輯, 1993

（二）金文京氏の『三国志演義』版本研究

ご覧のように、1989年から93年までの5年間に、『三国志演義』の版本に関わる専門的な論考が相継いで8篇も書かれております。金文京・中川諭・上田望・丸山浩明の4名の研究者の名前が挙がっておりますが、この中で版本研究に先鞭をつけたのは、やはり金文京氏でした。『花関索伝』の校訂本を作成する傍ら、「関索」なる人物について神話的・説話的視点を導入しつつ深い思索を重ねてきた金氏にとって、現存する各種の『三国志演義』の版本において「関索」がいかなる扱いを受けているのか、その実態を綿密に調査し明らかにすることは、まさに焦眉の急であったものと思われまます。

そこで、金氏がまず手がけたのは、「関索」または「花関索」なる人物が登場する、建安の地で刊行された各種の『三国志伝』と称する版本に関する調査を進めることでした。1989年に『集刊東洋学』に発表された論文「『三国演義』版本試探」の中で金氏が行ったのは、1592年（明・万暦20年）に刊行された「余氏双峰堂刊本」を始めとする一連の「建安諸本」における「関索」または「花関索」の扱い方を逐一追跡し確認する作業でした。それと同時に、現存する『三国志演義』の最古の刊本である、1522年の所謂「嘉靖本（張尚徳本）」との字句の比較を行うことにより、「嘉靖本」にも意外に多くの誤謬が存在することを指摘し、従来、最良の版本として位置付けられてきた「嘉靖本」に対する認識に大きな疑問を投げかけたのでした。その結果、現存する「建安本」の中には、「嘉靖本」よりも古い形を残していると思われる箇所が幾つもあり、従って、刊行された年代のみを基準として『三国志演義』の本来の姿を判断することは危険であることを、広く関係者に訴えかけるものとなったのです。版本研究がかなり進んだ現在では、「建安本」はその刊行年代こそ「嘉靖本」よりも新し

いが、しかし、内容的に見ると、「嘉靖本」よりもさらに一層古い形を伝える部分を含む、という考え方が一般的になりつつありますが、89年当時は、まだそうした認識は薄く、『三国志演義』といえば「嘉靖本」の右に出るものは無い、「嘉靖本」こそが『三国志演義』の唯一最良の版本である、という誤った「常識」が普通にまかり通っていました。それは単に日本のみならず、中国の学界においても似たような状況であったと思われる。ともあれ、金文京氏のこの論文によって、『三国志演義』の版本、とりわけ「建安本」と「嘉靖本」に関する様々な問題点が改めて浮き彫りにされ、その後続々と『三国志演義』の各種版本に関する個別具体的な問題を扱う論考が書かれるようになっていったのです。その意味で、金氏の論文は、『三国志演義』版本研究の牽引役を果たしたといえることができるように思います。

(三) 『三国志演義』の版本に関する様々な研究

続いて、金文京氏以外の若手研究者による版本研究についても簡単にご紹介しておきたいと思います。先程、金氏を含めて4人の研究者の名前を挙げましたが、この中で『三国志演義』の版本に関する最も多くの論文を発表しているのは、大東文化大学の中川諭氏です。中川氏は、1964年生まれで、今年43歳になる気鋭の研究者ですが、金文京氏とともに日本中国学会で『三国志演義』の版本に関する共同発表を行い、その成果をもとに、89年の『集刊東洋学』第61号誌上に、「『三国演義』版本の研究～毛宗崗本の成立過程」と題する論文を発表しました。先程来ご紹介している金氏の論文と同じ雑誌の同じ号に掲載したことになります。

中川氏の『三国志演義』研究の方法は首尾一貫したものがあるように思います。それは、鬼面人を驚かすような特別な理論や手法を用いるのではなく、現存する『三国志演義』の複数の版本を丹念に比較して、その文章や表現の異同を検討することにより、版本相互間の継承関係を明らかにしようとするものです。89年に書かれた論文は、『三国志演義』の通行本として清代以降最も流布した所謂「毛宗崗本」を取り上げ、「嘉靖本」を含むその他の4種類の版本、

乃ち、「周曰校刊本」「呉観明本」「余象斗本」などをも詳細に比較検討することにより、どのような改編過程を経て「毛宗崗本」が成立したのかを明らかにしようとしたものです。中川氏は、これを皮切りとして、以後、現存する複数の「嘉靖本」の表現の相違を細かく検討したり、あるいは、「建安本」に関するより詳細な字句の検討を進めたりして、1998年に『『三国志演義』版本の研究』（汲古書院刊）と題する研究書をまとめあげ、これによって東北大学から文学博士の学位を授与されました。実在する複数の『三国志演義』の版本を細かく比較しながら、徐々に『三国志演義』の成立課程を探り、相互の継承関係を整理する中から羅貫中の原作の姿を推定するという実証的な手法は、かくあるべし、という理論ばかりを先行させる研究とは異なり、非常に価値ある手堅いものであるように思われます。多くの比較研究を積み重ねた結果として、中川氏は『『三国志演義』版本の研究』の「結論」の中で、現存する版本の系統図を作成し、次のように結論付けています。

『三国志演義』は明代の長編白話小説としては『水滸伝』・『西遊記』と同様に多くの版本が現存するにも関わらず、『水滸伝』・『西遊記』に比べて、版本研究はかなり立ち後れたものだった。その原因として金文京氏は、『三国志演義』は歴史に依存する部分が多いため、版本が変わっても内容は同じであると思われていたこと、そして現存最古の版本である嘉靖本が通俗小説らしからぬほど外見が立派であることの二点を挙げておられる。しかし、一九六七年に『成化本説唱詞話』が発見され、この中に含まれていた『花関索伝』によって、関羽の架空の息子関索の伝説が次第に明らかになってきた。こうしてようやく従来の『三国志演義』の版本研究を見直そうとする動きが出てきたと言える。『花関索伝』の研究が進むに連れて、『三国志演義』の版本研究も少しずつ進んできた。筆者の『三国志演義』の版本研究もちょうどこうした状況の中で始まった。そしてここに一つの結論を導きだしたつもりである。『三国志演義』という一つの文学作品を正確に理解するためには、まずこのような『三国志演義』の版本の状況を

十分に踏まえておかなければならないのではないかと思う。

(中川論『三国志演義』版本の研究』汲古書院, 1998年, 404頁)

この「結論」の中には、日本における『三国志演義』の版本に関する研究の歴史が要約されているように思われます。そしてそれは、今回私がお話しようとしている方向とも基本的に一致するものです。

金氏や中川氏以外にも、上田望氏と丸山浩明氏の研究があります。上田望氏は現在金沢大学で教壇に立っておられますが、上田氏も、中川氏とほぼ時期を同じくして『三国志演義』版本の研究に取り組み、「『三国演義』版本試論～通俗小説の流伝に関する一考察」や「明代における三国故事の通俗文芸について～『風月錦囊』所収『精選続編賽全家錦三国志大全』を手掛かりとして～」など、新資料を駆使した注目すべき論考を次々に発表されましたが、最近では『三国志演義』の語彙を数理的に分析することによって版本間の継承関係を新たに捉え直したり、日本の江戸時代における『三国志演義』受容の歴史を新資料によって丹念に跡づけるなど、これまでになかった斬新な手法を用いて『三国志演義』を多角的な視点に立って分析しつつあります。

また、丸山浩明氏は、『三国志演義』の他、『水滸伝』『西遊記』『儒林外史』など、明代の章回小説全般に対する研究を行い、さらに加えて、明代の印刷事情から版本史を見直す作業を進め、それらの成果を2003年に『明清章回小説研究』として一書にまとめ、汲古書院から刊行されました。丸山氏はかつて復旦大学古籍研究所に留学されたこともあり、『明清章回小説研究』が出版されるにあたって、章培恒先生が2000年に「序」文を寄せてその成果を高く評価しておられることについては、ここにいらっしゃる多くの方が既にご存知のことと思います。

(四) 金氏論文の「補注」と葉逢春本『三国志通俗演義史伝』の存在

『花関索伝の研究』刊行直後に書かれた8篇の版本研究論文について簡単にご紹介しましたが、ここで再び話を金氏の論文にもどすことにします。結果的

に見て、その後の私自身の『三国志演義』研究に対して極めて大きな意味を持ったのは、やはり金氏の論文でした。と申しますのは、金氏が公表した論文「『三国志演義』版本試探～建安諸本を中心に」に対する学者間の応酬の過程で、偶然にも、スペインのエスコリアル宮殿図書館に保管されている『三国志通俗演義史伝』の存在を知ることになり、あろうことか、その後まもなく、私自身が実際にその貴重な版本を調査するため、わざわざスペインに赴くことになったからです。

その間のいきさつについて、もう少し具体的にお話したいと思います。ご存知のように、日本では、学術雑誌に論文を発表した場合、その抜刷を作り、同僚や学界の関係者に配布して意見を仰ぐことが一般的になっていますが、金文京氏も同様の習慣に倣い、先程紹介した論文が刊行された後、私の手元にも一部論文の抜刷を送っていただきました。それを一読して、金氏の深い学識に改めて感心させられたことは言うまでもありませんが、その抜刷には、別紙の形で「補注」が付けられており、そこには、中国小説の専門家である大塚秀高氏から寄せられたアドバイスに対する謝辞も含まれていました。実は、その「補注」が、私にとって決定的な役割を果たしてくれたのです。少し長いものですが、その後の版本調査への直接のきっかけとなった貴重なものなので、敢えて以下に全文を転載しておきたいと思います。

補注

戴望舒『小説戯曲論集』（作家出版社 一九五八）所載の「西班牙愛斯高里亞爾靜院所蔵中国小説戯曲」によると、スペイン、マドリッド近郊のEl Escorial de San Ildefonso 修道院に、『新刊案鑑漢譜三国志伝絵象足本大全』（全十巻 存卷三、十。毎半頁十六行行二十字、上図下文）が所蔵されている。この本は、首頁に「書林蒼溪葉逢春綵象」、嘉靖二十七年鐘陵元峰子の序文があり、序文中に「書林葉静子加以図象、中郎翁葉蒼溪鑄而成之」とある由である。杜信孚『明代版刻綜録』によると、葉逢春の刊行したものとしては、万曆九年刊『唐陸宣公集』と万曆八年刊『孫尚書内簡

尺牘編注』がしられる。上記『三国志伝』の刊行は、万曆二十年刊の余象斗本より早い可能性が高いであろう。しかも余象斗本の末頁には、すでに触れた如く、「書林忠懷葉義刻」とある。この葉義と葉逢春の間にはなにか関係が有るかもしれない。もしそうであれば、筆者の余象斗本についての仮説は訂正せざるをえない。なんとかこのスペイン本をみてみたいものである。なお、杜氏は葉逢春を、余姚県人で嘉靖四十四年の進士、工部郎、廬州隕陽知府などを歴任した葉逢春（1532-1589）としたが、これはおそらく同名異人であろう。

戴氏のコメントについては、つとに大塚秀高氏よりご教示をうけていたにもかかわらず、筆者の怠慢と、どうせおなじものだろうという思い込みのため、調査を怠っていた。考えてみれば、筆者の『三国演義』研究は、どうせおなじであろうという思い込みが裏切られていく過程であったはずなのに、またもやおなじ過ちを犯してしまったわけである。深く反省して、今後の戒めとしたい。（「存卷三,十」は「佚卷三,十」の誤り；筆者注）

事の詳しいいきさつはわかりませんが、この「補注」を見る限りでは、金文京氏の論文「『三国演義』版本試探」を読んだ大塚秀高氏が、金氏論文中に触れられていない戴望舒論文の存在を指摘し、その「教示」に対して金氏が謝辞と反省を述べたものと思われまます。既に触れたとおり、この当時、閲覧可能な「建安本」の中で最も刊行年の古いものは、万曆20年刊の「余象斗本」でしたので、それよりもさらに古い刊本である可能性が高いスペイン、エスコリアル所蔵本に対して金氏が多大な興味を示したのは当然のことであったと考えられます。「補注」の中で金氏は、「なんとかこのスペイン本をみてみたいものである」と、学界未見の新資料に対して熱い思いを語っています。実は、勉強不足のため、この「補注」を読むまでは、私自身も戴望舒論文の存在を知りませんでした。これを讀んだ私もまた、金氏同様に、かつて遠くスペインの地まで運ばれていった『三国志演義』の古版本に対する思いが募り、将来もしも機会があれば、実際にこの目で確かめてみたいという思いを禁じ得ませんでした。

（五）スペインにおける私自身の調査について

強く願えば希望は叶う、とは日本でよく言われる言葉ですが、金氏論文の「補注」を読んだ直後に抱いた強い希望は、偶然にも、その数年後に実現することになりました。と申しますのは、私の勤務する関西大学には、「在外研究」という、若手の研究者を1年間にわたって海外で調査や研究に従事させてくれる有り難い制度があり、1994年度の在外研究員に選ばれた私は、8ヶ月間の上海滞在を経てオランダの漢学研究院に研究の拠点を移し、翌年の95年春に、念願のスペインを訪れるチャンスに恵まれたのです。オランダの漢学研究院に到着したのは1月初旬でしたが、ご存知のように、オランダの冬は長く、寒さも厳しく、来る日も来る日もどんよりと暗雲のたれ込めた曇天の中で過ごしていると、体調も崩しやすくなります。真冬に数ヶ月間暮らしていると、燦々と輝く太陽が無性に恋しくなります。というわけで、帰国を間近に控えた3月初旬、私はついにスペインに行くことを決意しました。太陽を求めて南下する、という意図もありましたが、それ以上に、かねて調査したいと考えていた『三国志演義』の貴重な古版本に関する有益な情報はオランダでは何一つ得られず、これは直接現地に足を運んで存在を確かめる以外に方法は無いと判断したためでもあります。そんなわけで、1995年3月6日早朝、スペインを目指して、オランダのライデン駅を出発しました。オランダからスペインに行くには、空路を利用すれば2時間余りで簡単にたどり着けるのですが、鉄道ファンでもある私は敢えて時間のかかる陸路を選び、フランスのパリを経由して、まる2日かけて夜行列車でマドリッドを目指すことにしたのです。列車の予約もせずに急遽出発したため、パリからマドリッド行きの夜行に乗り込むにあたって不要なエネルギーを消費することになってしまいましたが、それはともかく、翌日の7日の午前、無事マドリッドに到着した私は、睡眠不足のため疲労した身体を休める事もせず、ただちに列車を乗り換えてエスコリアルをめざしました。そして、幸運にも、その日のうちに幻の『三国志演義』の古版本に巡り会うことになったのですが、そのあたりの事は既に雑誌『東方』や翻刻本の「解説」などにやや詳しく書き、また、章培恒先生のご尽力により、『中華文史論叢』や『中

国文学古今演變研究論文集』などにも関連報告を掲載していただきましたので、ここで再び同じ内容を繰り返すことは差し控えさせていただきます。なお、お手元に配布しましたレジユメの末尾に、「『三国志通俗演義史伝（葉逢春本）』関連論考目録（稿）」を付けましたので、そちらをご覧いただければ、現在までに葉逢春本に関する研究がどこまで進んでいるかが、ある程度おわかりいただけるものと思います。ただ、今回この発表を準備する過程で、これまで報告していなかった事実を思い出しましたので、この機会をお借りして一つだけ付け加えておきたいと思います。

（六）いくつかの偶然と幸運

日本では最近、「セレンディピティ」という言葉が流行しています。「セレンディピティ」とは、簡単に言えば「偶然を幸運に変える力」とでも申しましょうか、普段、私たちの身の回りに生起するあらゆる偶然の出来事に対して、それをぼんやりと見過ごさず、自分に強く引きつけて、次のステップを踏み出すためのエネルギー源にする、という姿勢を言うようです。もともと理科系の人々の間で使用されていた言葉のようですが、最近は分野を問わず、広く一般的に使われるようになってきました。どうしてこのような言葉を持ち出したかと言いますと、私とエスコリアル宮殿図書室にある『三国志通俗演義史伝』との出逢いも、後で振り返って見ると、まさに「セレンディピティ」以外の何物でもなかったと考えられるからです。この点についてももう少し詳しくお話したいと思います。

先程申しましたように、私は1995年3月7日の昼過ぎにエスコリアル宮殿に到着し、宮殿の1階にあるバルで軽食を摂った後、観光ルートに従って宮殿内を歩き回り、一般観光客とともに王宮図書室にたどり着きました。それは午後12時半過ぎであったかと思います。そこには常時警備員が2人立っていて、観光客が国王の書架に収められた書籍に勝手に手を触れたりしないように見張っているのです。2人のうちの1人は、60過ぎにもなろうかと思われる白髪交じりの年輩の紳士でしたが、私が日本からはるばる来た目的を英語で告げると、

紹介状も無く突然訪れた異邦人であるにもかかわらず、ただちに小さなドアの先にある小部屋に案内し、英語を理解しない神父にスペイン語で事情を告げて、漢籍閲覧の交渉をしてくださったのです。スペインという国では研究者に対しては比較的優遇してくれることは以前から耳にしていたのですが、身分証明書も提出しないまま名刺を一枚通じただけで貴重な書籍をただちに閲覧させてもらえるとは夢にも思っていませんでした。仮に『三国志演義』の古版本が所蔵されているにしても、かなり面倒な手続きが必要になるものとばかり思っていた私は、突然訪れたチャンスを前にしてかなり戸惑いましたが、実際、訪問した当日のうちに目指す貴重書を閲覧することができたのですから、これは全くの「セレンディピティ」であったとしか言いようがありません。後にわかったことですが、私に便宜を図ってくださった警備員の方は、名前をホセ・ド・プラードといい、定年を目前に控えた、長年エスコリアル宮殿に勤務した地元の方でした。

私に訪れた幸運はそれだけではありませんでした。エスコリアル宮殿図書室に保管されている葉逢春本『三国志通俗演義史伝』は、何しろ1548年、明の嘉靖27年の序文をもつ古い刊本ですから、堅牢な皮表紙で保護された外面はともかく、本文用に使われている紙は相当に乾燥しており、丁寧にページをめくらないと紙の一部が破損してしまうため、通常の方法による電子複写が許されないことは予め覚悟していました。数枚分でも構わないので複写させてもらえないかと頼んでみましたが、案の定、答えは不可でした。帰国日を間近に控えていた私は、やむなく、近所の文房具店で画用紙とノートを大量に買い込み、その日から寸暇を惜しんで本文を書き写すことにしました。とはいっても、図書館の開館時間は平日の午前中のみ、一日わずかに4時間程度しかありません。しかも、宮殿内で何か特別の行事があったりすると、突然閉館を宣言されることさえあります。膨大な量にのぼる葉逢春本の全文を書き写せるはずもなく、休み無くしばらく転記していると腱鞘炎に近い状態になり、いたずらに時間が過ぎ去って、私は次第に焦ってきました。しかし、自分の手で書き取る以外にどうすることもできず、昼食もそっちのけでひたすら転写する作業を続けてい

ました。すると、数日経ったある日のこと、私を神父に紹介してくださった警備員のプラードさんが、私の机に一枚のメモ書きを置き、当時マドリッドから列車に乗って連日通っていた私に、自分はこの地でホステルを経営しているので、もし良ければ宿泊するように、と誘ってくださったのです。私にしてみれば、まさしく「渡りに船」、毎日マドリッドから1時間もかけて通うのは大変骨の折れることですし、交通費も儉約できますので、好意に甘えてそのホステルに住み込むことにしました。3月はシーズンオフで観光客が少なかったことも手伝ってか、私はそのホステルで随分と歓待されまして、それ以来、気分良く転写作業を続けることになったのですが、それからさらに数日した頃、突然、電子複写は許可できないが、マイクロフィルムを新たに作成するならば許可しても良い、との連絡を受けました。それも、書物の一部ではなく、全文をそっくり撮影しても良いというのです。「晴天の霹靂」とはまさにこのことで、私はとっさに自分の耳を疑いました。しかし、それは夢ではなく、所定の手続きを済ませた後、当該書籍はマイクロフィルム撮影のためにしばらく閲覧不可能となり、約1週間後再び現地を訪れた私の手元に、第9巻を除く全文のマイクロフィルムが届けられたのです。時間の関係上、9巻だけは間に合わないため、帰国後に勤務先に送付する、との約束を取り付けて、私は予定通り3月31日に嬉々として帰国しました。

今にして思えば、もし仮にあの時、プラードさんが私に声をかけてくださらなかったら、恐らくマイクロフィルムは入手できなかったでしょうし、従って、帰国後に関西大学出版部から3年間かけて翻刻本を出すこともできなかったでしょう。そうすると、その後現在に至るまで約10年間にわたって行ってきた私自身の『三国志演義』研究も、今とは全く異なったものになっていたに違いありません。翻刻本が完成した98年夏には、章培恒先生に研究の成果を報告しに参りましたが、肝心のマイクロフィルムが手に入らなければそれもできなかったでしょうし、ましてや、今回このようにしてお話する機会をいただくことも、恐らくなかったことと思います。そう考えてみると、私がたまたまエスコリアルを訪れた95年当時、先程申し上げた警備員のプラードさんが間もなく定年を

迎えられる年頃であり、日本人に対して好意的であったことや、時間に追われて必死に書き写そうともがいていた姿が目に残った結果撮影が許可されたことなど、幾つかの偶然が重なって、無事マイクロフィルムを日本にもたすことが出来たのだと、改めて「セレンディピティ」という言葉の意味をかみしめている次第です。『三国志通俗演義史伝』との出逢いの経緯をお話する余り、つい学問そのものとは関係のない話に熱が入ってしまいました。どうかお許しいただきたいと思えます。

（七）葉逢春本『三国志通俗演義史伝』の価値と研究の現状

さて、時間もかなり経ちましたので、そろそろ第2回目の話を終わりにしたいと思います。ここで、エスコリアル宮殿図書館に眠っていた葉逢春本『三国志通俗演義史伝』が『三国志演義』版本史上においてどのような価値を有しているかという点と、今後解決すべき問題点について簡単に触れておきたいと思えます。

まず、版本史上においていかなる価値があるか、という問題ですが、これについては既に章培恒先生が『中華文史論叢』第60輯の中で詳しく検証されておられますように、葉逢春本の出現によって、作者の問題と執筆年代に関する新たな事実が浮かび上がってきましたし、また、高橋乃子氏や中川諭氏なども本文の字句に関する詳細な検討結果を報告しておられますので、ここであまり詳しく述べる必要はないかと思えます。一つだけ申し上げるとするならば、この葉逢春本の発見によって、現存する「建安本」の中で最も古い版本の姿が明らかになり、それによって、『三国志演義』の元来の姿がある程度推定できるようになった、ということです。もちろん、「嘉靖元年序刊本」以前の『三国志演義』の刊本が発見されていない現状では、あくまでも推定の域を出ないわけですが、作者の問題や、『三国志演義』成立の時期に関する問題、あるいは現存する各種の版本間の継承関係を明らかにする上で、この葉逢春本の公刊が大きな役割を果たしたことは否定できないと思えます。

今から2年前の事ですが、去る2005年の春、中国においても、エスコリアル

にある葉逢春本『三国志通俗演義史伝』がついに影印出版されました。全国図書館文献縮微複製中心から刊行された『三国志演義古版叢刊続編』の第1冊目と2冊目に収められています。主編者である陳翔華氏は影印本の巻頭に「西班牙蔵葉逢春刊本三国志史伝瑣談」と題する長文の論文を載せ、その「注釈」の(二)において、影印出版に至るまでの経緯について触れ、複数のルートを通じて葉逢春本のマイクロフィルムを入手したことを述べています。そこにはハーバード大学の「沈津先生」及び京都大学の「金文京教授」の名前が挙がっています。その事に関しては、実は私自身もある程度関与しておりまして、発言したいことも多少ありますが、残念ながら現在はまだお話できる状況ではありませんので、いずれ機会をみて発言させていただくつもりでおります。それはともかく、私が翻刻本を完成させて関西大学出版部から公刊したのが1998年春のことでしたので、それから7年後に中国の学界にも葉逢春本が正式に公開されたこととなります。これによって中国国内においても今後ますます『三国志演義』の版本研究が進むものと期待されます。

葉逢春本『三国志通俗演義史伝』に関する問題点については、先程述べました陳翔華氏の論文「西班牙蔵葉逢春刊本三国志史伝瑣談」の中に要領よくまとめられているように思われます。そこで、最後に、陳翔華氏の見解を紹介しつつ、今後に残された解決すべき問題点を列挙して、この講演を終わりたいと思います。

スペインに渡った葉逢春本『三国志通俗演義史伝』については、以下に述べる幾つかの疑問と問題点があります。

- 1 正式な書名は何か
- 2 初刻本か重刻本か
- 3 体裁上の疑問
- 4 その他の疑問

まず、書名に関してですが、今回の講演の中で私は一貫して『三国志通俗演

義史伝』の名称を使ってきました。ただし、この名称は私が関西大学出版部から当該書物の翻刻本を出版する際につけた名称であり、実際の書物は、各巻ごとに微妙に異なる名称が使用されております。例えば、巻一の巻頭には『新刊通俗演義三国志史伝』とありますが、巻二の巻頭では『通俗演義三国志史伝』、巻九の巻頭は『三国志通俗演義史伝』となっております。現存する全8巻分の書名を仔細に検討いたしますと、それぞれの書名は、「三国志」「通俗演義」「史伝」の三つの要素を適当に組み合わせて出来上がっていることがわかります。中には更に「新刊」「重刊」のいずれかの二文字を頭にかぶせたものもあります。このように、巻毎に微妙に書名が異なっているのは、最初に出版された時に全10巻が一括してセットで販売されたのではなく、巻毎に個別に刊刻され販売されたという事情に由来するのではないかというのが、現時点における私の意見ですが、特に証拠があるわけでもなく、あるいは見当違いかも知れません。ともかく、葉逢春本には統一した書名というものがありませんので、全体としてどのような名称を付ければよいのか、問題になるところです。ちなみに、陳翔華氏は、目録学の通例に倣って、巻一の巻頭にある名称『通俗演義三国志史伝』を正式な書名とするのが妥当であるとの見解に立っておられます。

次に問題となるのは、スペインの葉逢春本は果たして初刻本であるのか、ということです。この点に関しては、刻字の様態から見て、初刻本である可能性は少ないとする陳翔華氏の見解が正しいように思われます。「重刊」の二文字を書名の頭に冠する箇所が1箇所、巻6にあることも、その証拠になりうるものと思われます。私の考えでは、1548年（嘉靖27年）以前に、文字のみを刻した『三国志史伝』が恐らくは建安あたりで刊行されていて、それに新たに「図像」を加えることによって「庸常之通曉」、つまり、「普段あまり文字に親しみが無いような人々にも分かり易くした」のが、葉逢春本だったのではないかと思います。「元峰子」なる人物がわざわざ「序」文の中でそのことに触れているのは、やはりそれなりの斬新な点がこの葉逢春本にあったからでしょう。

ただ、初刻本の刊行年については二つの考え方が可能であるように思われます。一つは、陳翔華氏の言うように、序文の書かれた1548年前後に初刻本は刊

行されたが、スペインにある葉逢春本自体はその原本の版本を使って重刻されたものであり、従ってスペイン本は1548年以後の刊本であると考えられるもの。もう一つの考え方は、「図像」を含まない、文字だけの『三国志史伝』が1548年以前に刊行されていて、それに新たに「図像」と「序文」を加えて刊行されたのが1548年前後であったとするものです。後者の立場を採るならば、文字だけによって構成された「建安本」『三国志演義』の刊本の登場は、1548年よりも更に遡るわけで、場合によっては現存する最古の刊本である所謂「嘉靖元年序刊本」よりも早くなる可能性も否定できないことになります。ただ、この点も今のところ推測の域を出ない仮説に過ぎませんので、これ以上は申し上げないことにします。

スペインの葉逢春本に関しては、もう一つ、大きな疑問が残されています。それは、書物の体裁に関することですが、明代に刊行された他の『三国志演義』の通常形式としては、本文に入る前に個別の登場人物の名前やその官職名を国別に列挙するのが一般的です。ところが、この葉逢本に限っては、一応「三国君臣姓氏附録」と銘打った部分があるにもかかわらず、具体的な登場人物の名前は一切無く、例えば「魏国帝紀」であれば、ごく簡単に「后妃紀」「臣紀」「皇族紀」「別伝」などの項目があるだけで、実際の人物に関する記述は何もありません。これはいったいどういうことなのでしょう。葉逢春本の段階では簡略にしか記述されていなかった登場人物に関する事柄が、その後の版本、例えば「余象斗本」などで詳しく記載されるようになった、と考えることもできるでしょうが、もう一つの考え方として、葉逢春本以前の刊本にもともとあったものが、葉逢春本に至って何らかの事情により省略された、と見ることもできるように思います。どちらが正しい見解なのか、これについても今後更に慎重に検討する必要があるように思われます。

また、これは私が翻刻本の「解説」の中で触れたことですが、フランスのペリオが1929年に書いた報告文によれば、当時エスコリアルには「葉逢春本」は「9部9巻」あったはずなのですが、現存しているのは「8巻」にすぎません。第3巻と第10巻は既になくなっていました。ペリオが巻数を数え間違えたのでし

ようか、それとも、1929年当時は9巻あったものが、その後1巻分、どこかに消えてしまったのでしょうか。仮にペリオの報告が正しいとすると、「3巻」と「10巻」のどちらかが今後新たに発見される可能性もないわけではありません。さらに言えば、葉逢春本がエスコリアル宮殿にもたらされた当初、10巻全てが揃っていたのでしょうか。それとも、ペリオの言うように、元来9巻しかない端本として運ばれて来たのでしょうか。これも今の段階では確証はありませんが、ペリオの報告にはっきりと「9部9巻」と書かれているだけに、真相はどうであったのか、些か気になるところです。

（八）まとめにかえて

さて、これまで長時間にわたって、私自身の『三国志演義』との関わりを大きく二点に絞って述べさせていただきました。まとめて言うならば、私の『三国志演義』との関わりは『花関索伝の研究』刊行によって始まり、それを一つの機縁としてスペインの葉逢春本『三国志通俗演義史伝』にまでたどりついたこととなります。その間の経緯について今回やや詳しくお話することができたことを私としては非常に嬉しく思います。ただ、その多くは個人的な体験談に過ぎず、肝心の『三国志演義』研究の現状と問題点について充分にお話することができなかつたように思います。この点については、「日本人と『三国志演義』」と題して、次回に改めてお話する予定であります。

ということで、第2回目の講演はこのあたりで終わらせていただきます。本日はお忙しい中、多数の方々にご来聴いただきましたこと、改めて感謝申し上げます。また、当初予定していた時間を大幅に超過してしまいましたことをお詫びいたします。ご清聴ありがとうございました。

（以 上）

(資料)

『三国志通俗演義史伝（葉逢春本）』 関連論考目録（稿）

【1980年以前】

- 1 「Notes sur quelques livres ou documents conserves en Espagne.」
(Paul PELLIOT : 『T'OUNG PAO』 XXVI, 1929)
- 2 「流落於西葡的中國文獻」(方豪 : 『學術季刊』 1卷2期, 3期, 1952)
- 3 「西班牙愛斯高里亞爾靜院所藏中國小說, 戲曲」(戴望舒 : 『小說戲曲論集』 作家出版社, 1958)
- 4 「The Manila Incunabula and early Hokkien Studies」(P.Van Der Loon : 『Asia Major』 XII, 1966)
- 5 「Los libros chinos de la Real Biblioteca EL Escorial」
(GREGORIO DE ANDRES : 『MISSIONALIA HISPANICA』 XXIV, 76, 1969)
- 6 「漢字の西方伝播」(榎一雄 : 『月刊シルクロード』, 1978)

【1990年代】

- 7 「エル・エスコリアル修道院収蔵漢籍をめぐって～『三国志演義』の版本を中心に～」(井上泰山 : 「関西・中国芸能を楽しむ会」口頭発表, 1995.6.30)
- 8 「スペイン・エスコリアル修道院蔵『三国志演義』について」
(井上泰山 : 『関西大学中国文学会紀要』 第17号, 1996.3)
- 9 『三国志通俗演義史伝（上）』(井上泰山編 : 関西大学出版部, 1997.4.1)
- 10 「スペイン・エスコリアル修道院蔵『三国志演義』を尋ねて」
(井上泰山 : 『東方』 199号, 1997.10)
- 11 「『新刊通俗演義三国志伝』の性質」(中川諭 : 『中国古典小説研究』 第3号, 1997.12.20)
- 12 『三国志通俗演義史伝（下）』(井上泰山編 : 関西大学出版部, 1998.3.15)
- 13 『三国志通俗演義史伝』「解説」(井上泰山 : 『三国志通俗演義史伝（下）』 関西大学出版部, 1998.3.15))
- 14 「关于西班牙爱斯高里亚尔修道院所藏之嘉靖刻本《三国志通俗演义史传》」

私と『三国志演義』研究（下）（井上）

（陈桂声：『明清小説研究』第50期，1998.7）

- 15 「『新刊通俗演義三国志史伝』について」（中川諭：『三国志演義版本の研究』第3章 第2節，1998.12.15，汲古書院）
- 16 「西班牙愛斯高里亞爾靜院所藏《三國志通俗演義史傳》初考」（井上泰山：『中華文史論叢』第60輯，1999.12）
- 17 「再談《三國志通俗演義》的成書時代～以葉逢春本《三國史傳》爲中心～」（章培恒：『中華文史論叢』第60輯，1999.12）

【2000年以後】

- 18 「中国学最前線・三国志演義」（中川諭：『しにか』，2000.8.1，大修館書店）
- 19 「關於《三國演義》葉逢春刊本的發現及其意義」（高橋乃子：『中国文学研究』第3輯，2000.8）
- 20 「《三國志演義》研究的現狀和展望～以葉逢春本『三國志通俗演義史傳』爲中心」
（井上泰山：「中国文学古今演變研究國際學術研討會」口頭發表，2001.11.16）
- 21 「叶逢春本《三国志传》题名“汉谱”说」（杨绪容：『明清小説研究』第64期，2002.2）
- 22 「『三国志演義』研究の現狀と展望～葉逢春本『三国志通俗演義史伝』の価値をめぐって」（井上泰山：『文化事象としての中国』，2002.3.31，関西大学出版部）
- 23 「《三国演义》研究的現狀和展望～以叶逢春本《三国志通俗演義史傳》爲中心」
（井上泰山：『中国文学古今演變研究論集』，2002.5，上海古籍出版社）
- 24 「西班牙藏叶逢春刊本三国志史传琐谈」
（陈翔华：『西班牙藏叶逢春刊本三国志史传』上，2004，全国图书馆文献缩微复制中心）
- 25 「《三国志演义》嘉靖壬午本与叶逢春刊本比较——人数变化百例」
（刘世德：『中国古代小说研究』第1集，2005，人民文学出版社）
- 26 「《三国志演义》版本举隅」（金文京：『中国古代小说研究』第1集，2005，人民文学出版社）